

関係機関と連携した不登校支援 スクールソーシャルワーカー による支援を中心に

北海道スクールソーシャルワーカー・スーパーバイザー
日本医療大学 丸山正三

学校に行くことができない子どもの増加

北海道の不登校児童生徒 約13,000人（2022年）



【図2】1,000人当たりの不登校児童生徒数の推移

実態調査結果

インターネット調査
子ども本人の回答

子どもたちの学校生活実態

17.9%の生徒
(不登校傾向含む)

十分に学べる環境がない!

不登校／不登校傾向の子どもたち(中学生)のボリュームを調査

	学校生活をめぐる子どもの特徴(タイプ)	2018年		2023年	
		推計人数	割合	推計人数	割合
30日以上 欠席	不登校A ①-1_1年間に合計30日以上、学校を休んだことがある/休んでいる	99,850	3.1%	147,951	4.7%
1週間以上 連続欠席	不登校B ①-2_1週間以上連続で、学校を休んだことがある/休んでいる	59,921	1.8%	124,828	3.9%
学校内で 行動表出	教室外登校 ②学校の校門・保健室・校長室等には行くが、教室には行かない	130,703	4.0%	155,584	4.9%
	部分登校 ③基本的には教室で過ごす、授業に参加する時間が少ない				
	授業不参加型 ④基本的には教室で過ごす、皆とは違うことをしがちであり、授業に参加する時間が少ない (「教室にはいたが、みんなとは別の勉強など、他のことをしていた」月 2~3回以上、もしくは1週間 つづけて)				
学校内で 行動非表出	形だけ登校 ⑤基本的には教室で過ごし、皆と同じことをしているが、心の中では学校に通いたくない・学校が 辛い・嫌だと感じている (※行動表出なし/「学校に行きたくないと思ったこと」毎日)	142,161	4.4%	138,685	4.4%
	オンライン 登校 ⑥オンライン登校(自宅からオンラインで授業に参加)			52,663	1.7%
	登校 ①~⑥非該当	2,819,049	86.7%	2,557,836	80.5%

※構成比は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計しても必ずしも100とはならない。
※推計人数は全国の中学生生徒数と今回調査の発現率より試算

※2018年は日本財団による「不登校傾向にある子どもの実態調査」の結果
Copyright © Katariba (Approved Specified Non-Profit Organization) All Rights Reserved.

4

実態調査結果

不登校の子は「体調に異変をきたす」項目を多く選択

中には「音が気になる」など特性による内容も

No.	選択肢	通常登校	不登校	差
1	学校に行こうとすると、体調が悪くなる	1.2%	② 40.0%	38.8
2	学校は居心地が悪い	2.7%	35.6%	32.9
3	授業がよくわからない・ついていけない	8.1%	⑤ 35.4%	27.3
4	朝、起きられない	14.5%	③ 38.6%	24.1
5	自分でもよくわからない	12.7%	④ 36.2%	23.5
6	学校の騒がしさや大きな音が嫌、気分が悪い	1.8%	24.0%	22.2
7	友達とうまくいかない	9.7%	31.9%	22.2
8	疲れる	21.9%	① 43.9%	22.0
9	学校に行く意味がわからない	3.3%	22.5%	19.2
10	先生とうまくいかない/頼れない	3.8%	21.6%	17.8

※n=通常登校: 4792、不登校 277

Copyright © Katariba (Approved Specified Non-Profit Organization) All Rights Reserved.

14

スクールソーシャルワークの始まり

- 20世紀初頭の米国、ニューヨーク、ボストンなどの都市で訪問教師の活動として始まる。
- 生活困窮で余裕がない、教育に理解のない家庭、英語に慣れない移民、などの理由から不就学の子ども達に、地域の中で読み書きを教え、生活環境を整える支援が行われた。
- **すべての子どもが教育を受ける権利を持つ**との理念からスクールソーシャルワーカーによる活動が発展してきた。



靴磨きの少年 ニューヨーク1910年



午前1時に新聞を売る少年たち 1906年

ソーシャルワークのグローバル定義

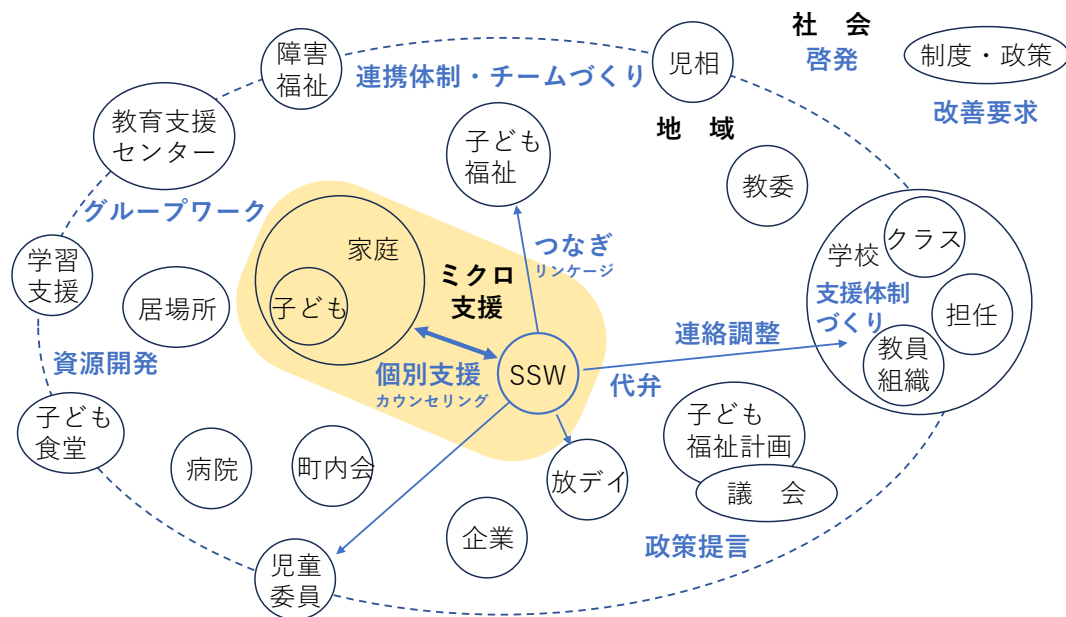
安心して学べる環境づくり

- ソーシャルワークは、社会変革と社会開発、社会的結束、および人々のエンパワメントと解放を促進する、実践に基づいた専門職であり学問である。
- 社会正義、人権、集団的責任、および多様性尊重の諸原理は、ソーシャルワークの中核をなす。
- ソーシャルワークの理論、社会科学、人文学、および地域・民族固有の知を基盤として、ソーシャルワークは、生活課題に取り組み**ウェルビーイングを高める**よう、人々やさまざまな構造に働きかける

一人一人の力を発揮できるように

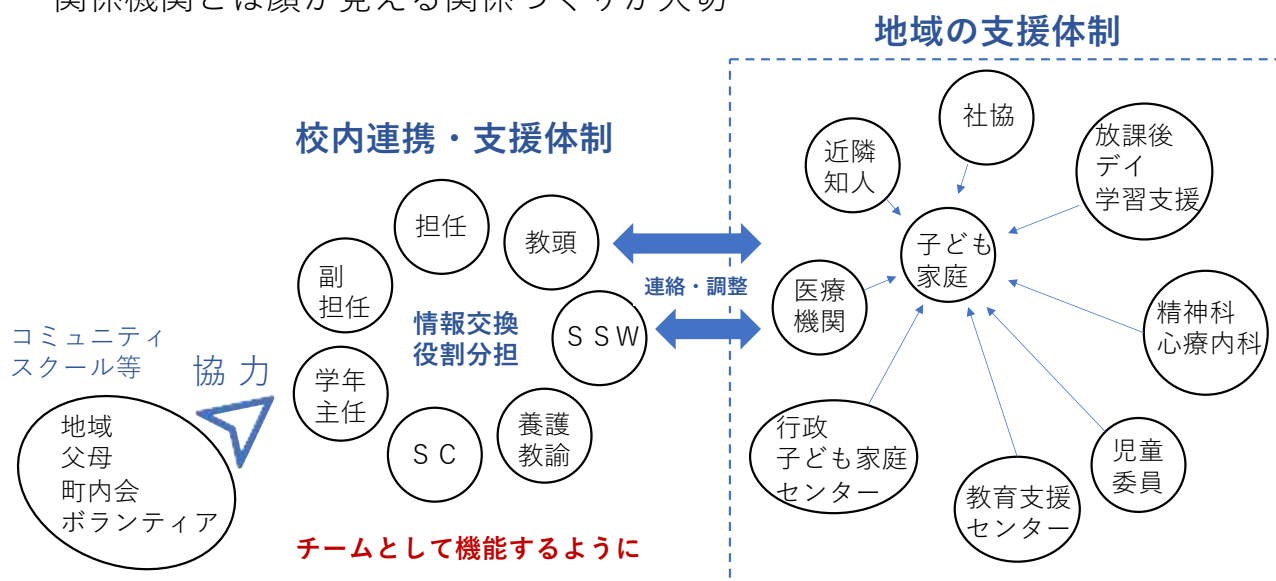
国際ソーシャルワーカー連盟 (IFSW) 2014年

スクールソーシャルワーカーの働き



校内・地域の支援体制づくり

支援の必要性を理解し役割を明確にする（担任をサポート・抱えこまないように）
 関係機関とは顔が見える関係づくりが大切



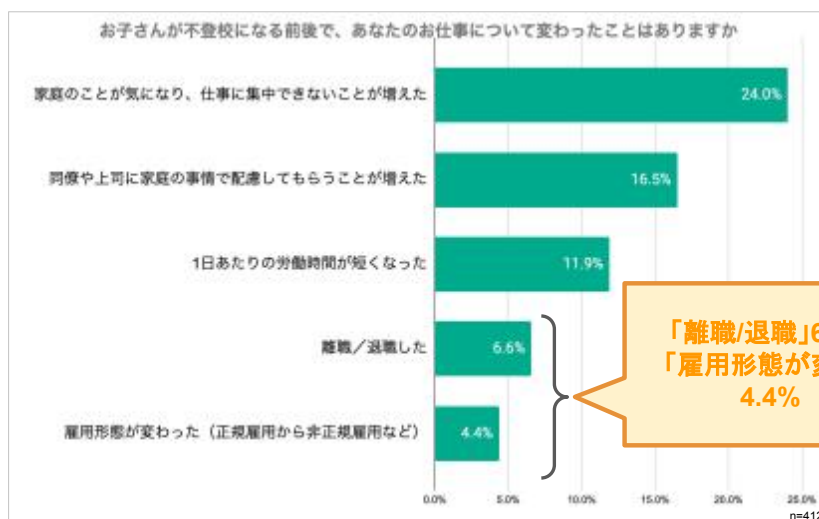
子どもの家庭と親の生活課題（実態調査）

実態調査結果

子どもの不登校による親の影響

退職/雇用形態変化など、保護者の環境に影響も

仕事を続けられたとしても「集中できない」「仕事場で配慮してもらったことが増えた」人も



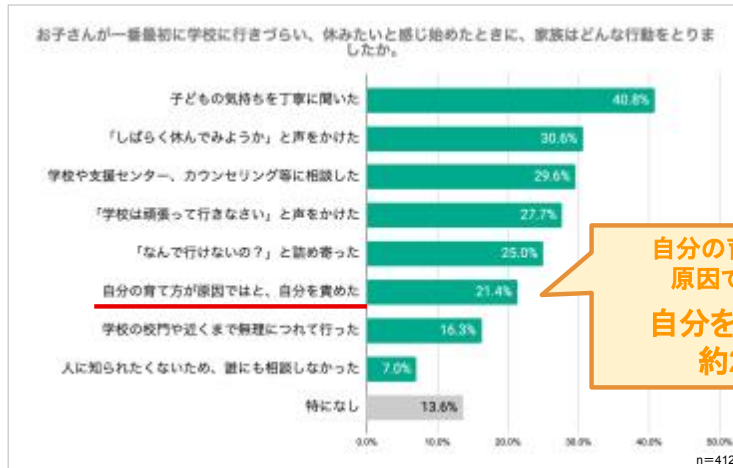
相互作用



子ども

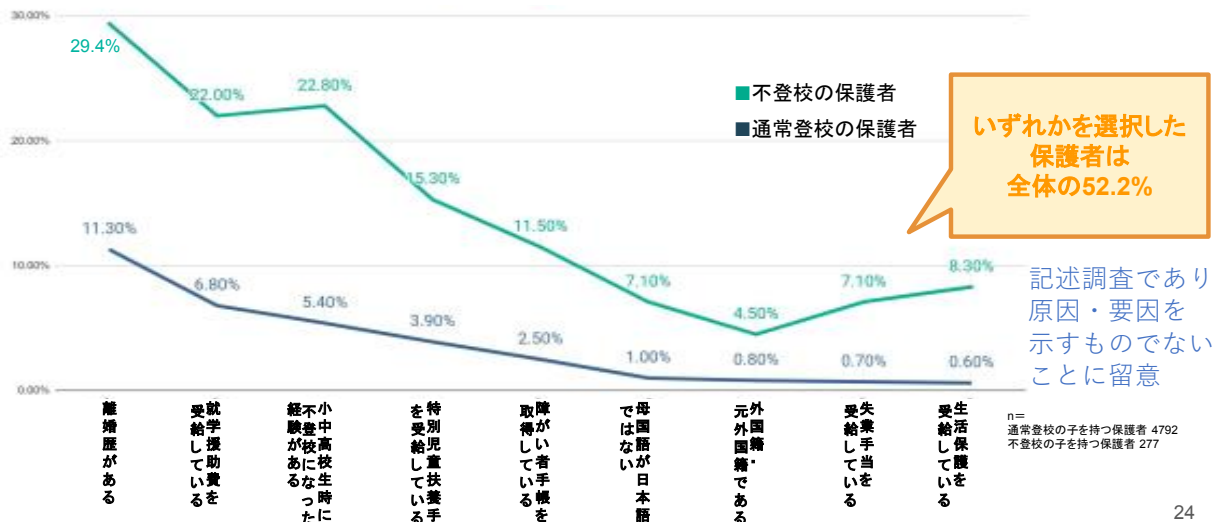
不登校児の親の5人に1人は自分を責めた経験

子どもの気持ちを聞いた・休む提案をした...など子どもに寄りそう親が多いが、無理して学校に連れて行こうとしたり、自分を責めたりした親も目立つ

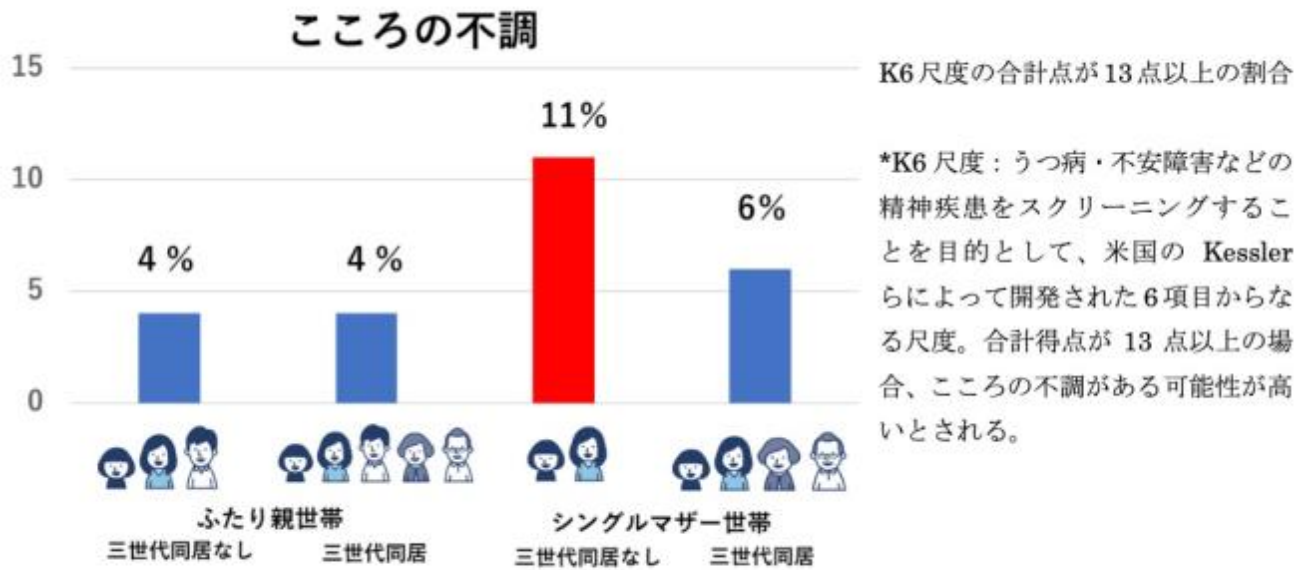


不登校の保護者は何らかの困難を抱えている割合が高い

不登校の保護者の半数以上が、収入・障害・言語・自身の不登校体験等の何らかの困難を抱えている

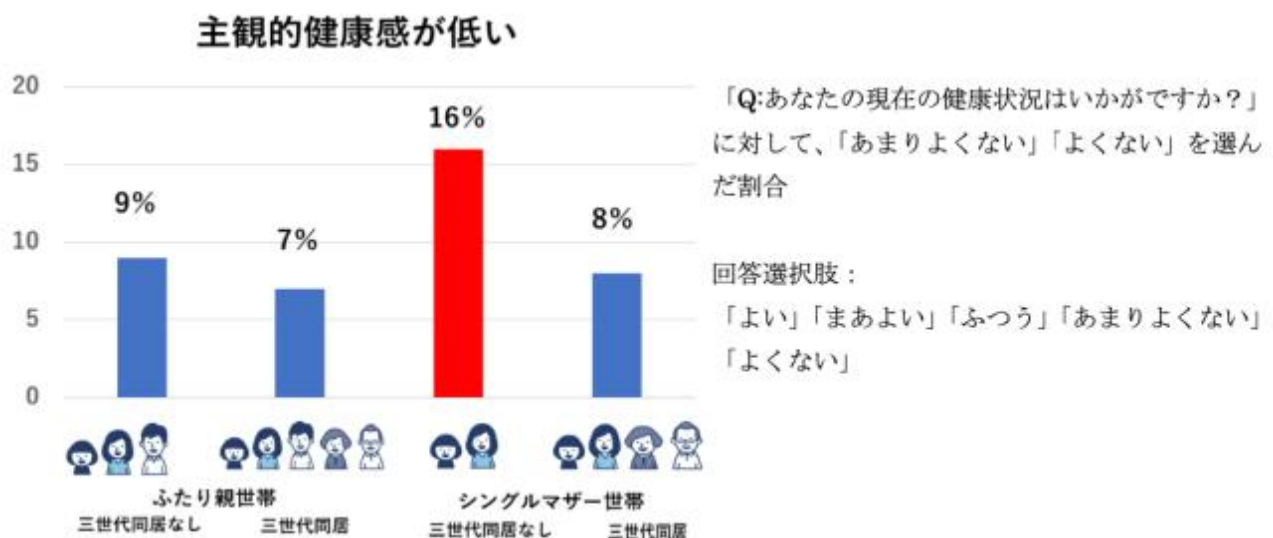


5歳未満の子どもを養育 シングルマザーに対する支援の必要性



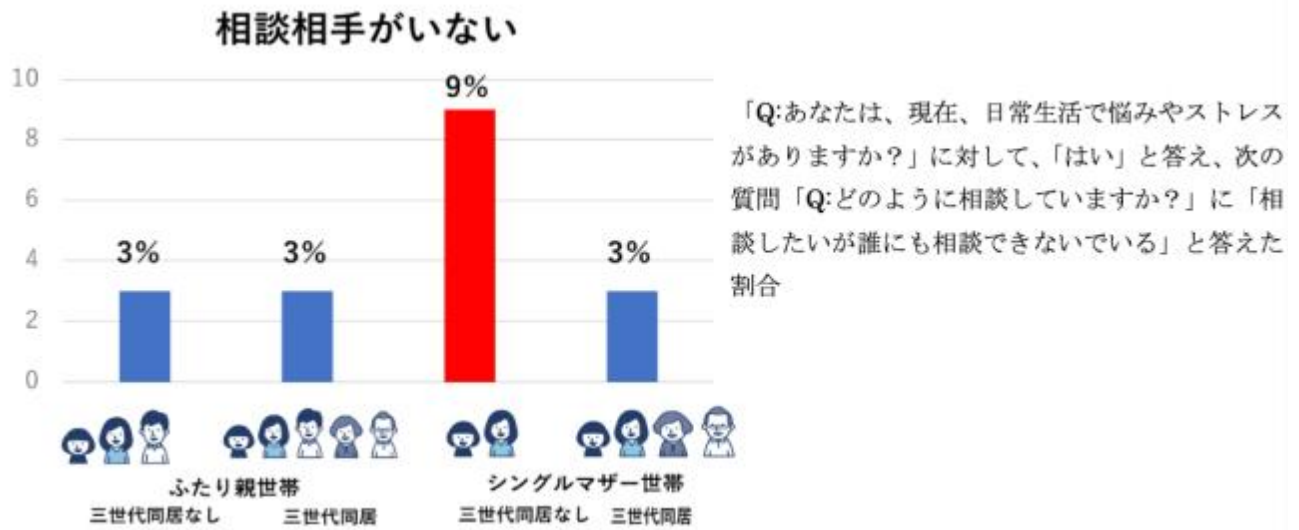
国立成育医療研究センター 2021年「一人で乳幼児を育てているシングルマザーの約9人に1人が「こころの不調」の可能性～社会から孤立しているため、積極的な支援が必要～」
<https://www.ncchd.go.jp/press/2021/20210324.pdf>

5歳未満の子どもを養育 シングルマザーに対する支援の必要性



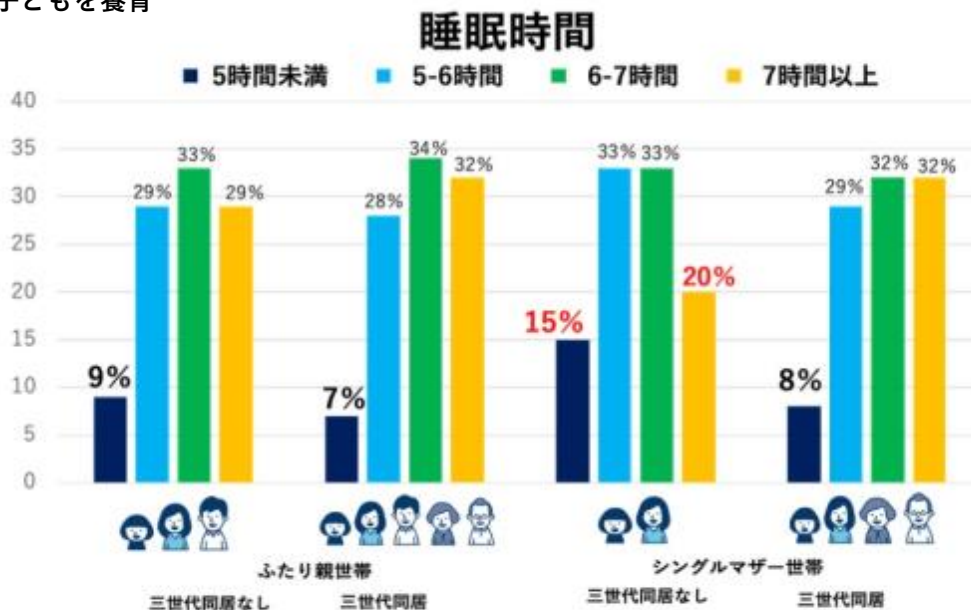
国立成育医療研究センター 2021年「一人で乳幼児を育てているシングルマザーの約9人に1人が「こころの不調」の可能性～社会から孤立しているため、積極的な支援が必要～」
<https://www.ncchd.go.jp/press/2021/20210324.pdf>

5歳未満の子どもを養育 シングルマザーに対する支援の必要性



国立成育医療研究センター 2021年「一人で乳幼児を育てているシングルマザーの約9人に1人が「こころの不調」の可能性～社会から孤立しているため、積極的な支援が必要～」
<https://www.ncchd.go.jp/press/2021/20210324.pdf>

5歳未満の子どもを養育



*図は小数点以下を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合があります。

国立成育医療研究センター 2021年「一人で乳幼児を育てているシングルマザーの約9人に1人が「こころの不調」の可能性～社会から孤立しているため、積極的な支援が必要～」
<https://www.ncchd.go.jp/press/2021/20210324.pdf>

不登校要因・背景の整理

不登校の要因・背景は、本人と家庭・学校それぞれにある。



- ・親子関係
- ・就学に対する考え
- ・経済状況
- ・病気や障害など



- ・様々な個性（発達障害含む）
- ・様々なストレス
- ・心身のバランスの崩れ
- ・意欲が押さえられている
- ・将来を描きにくい



- ・生徒に合わせた教育？
- ・自主性の尊重？
- ・生徒を承認？

不登校の要因
背景にも個別性がある。
個々に理解が必要。

不登校の支援・予防的体制づくり



- ・家族支援（安心感）
- ・病気、障がいのサポート
- ・経済支援（制度活用）
- ・情報提供（様々な可能性）



- ・居場所づくり（学習支援など）
- ・不登校に対する理解（啓発）



- ・学校に行かない選択を認める
- ・傾聴と受容、共感が基本
- ・課題に応じた対応
- ・やりたいを支援
- ・待つこと、成長を見守る



- ・早期対応
- ・アウトリーチ
- ・チームアプローチ
- ・個別対応

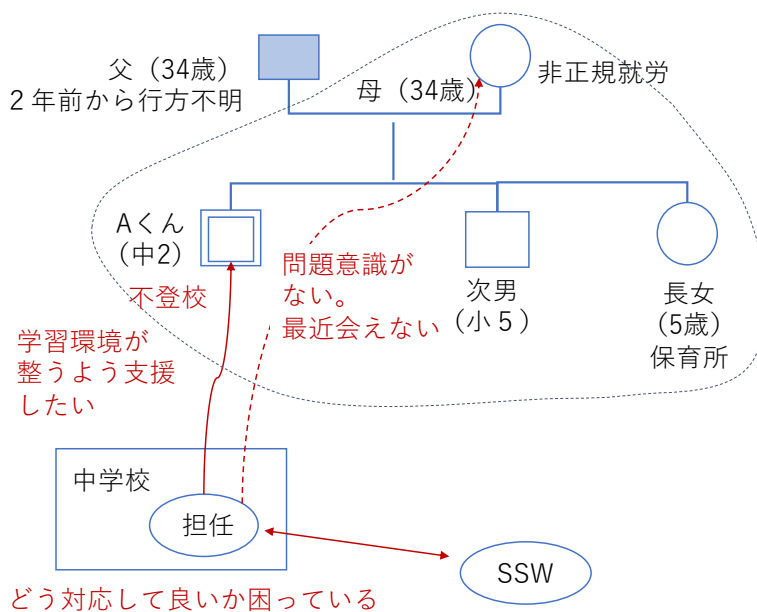


- ・ニーズアセスメント
- ・サービス調整
- ・連携と支援チームづくり

連携・チーム

支援の実際（事例を通して考える）

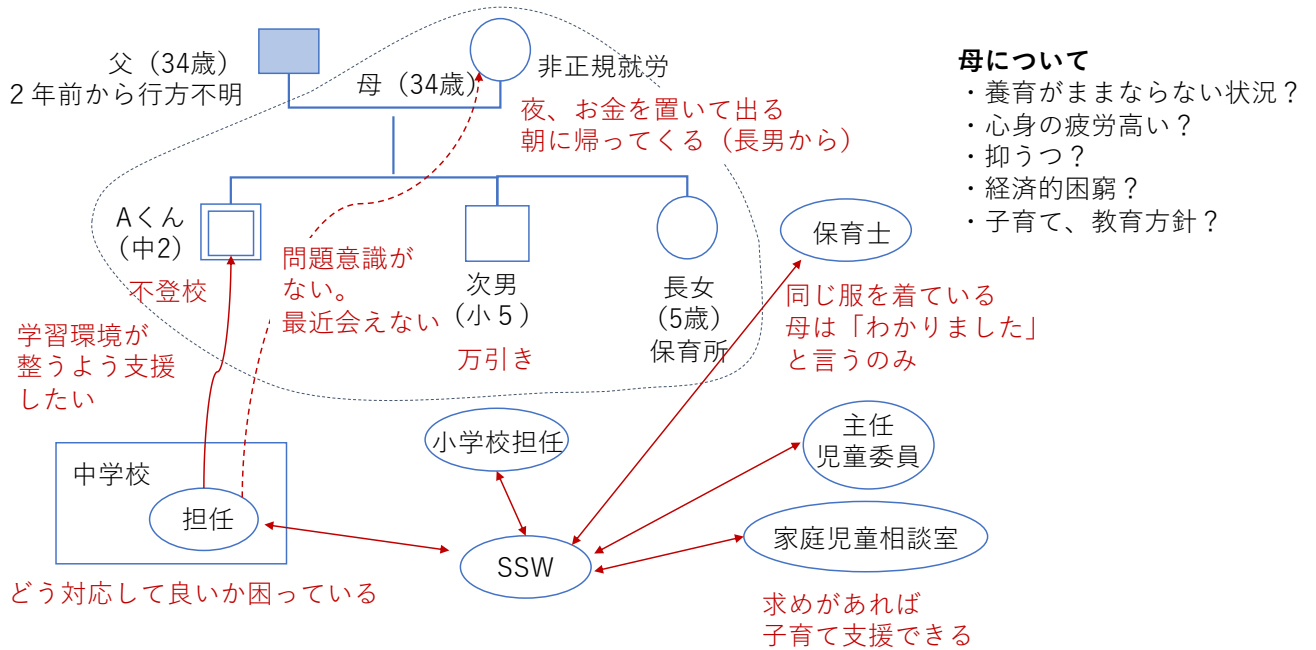
事例検討 Aくんと家庭について、どのような理解（可能性）ができますか？



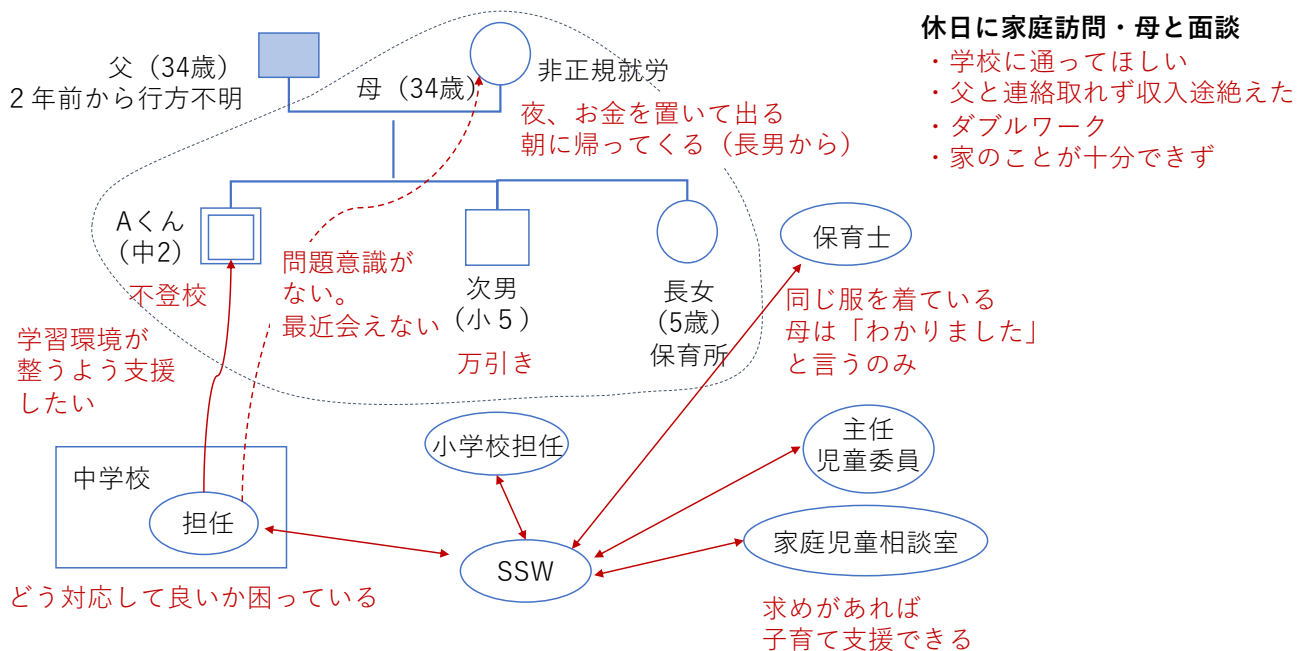
Aくんの状況

- ・朝起きられず遅刻が多くなっていた
- ・授業に集中できず、学習遅れがち
- ・学校を休むことが増えてきた

事例検討 Aくんと家庭について、情報を集めます



事例検討 Aくん家庭に対するアプローチ



見立てと支援方針

- 父の不在により、母の家計的負担が高まり、養育機能が果たせなくなっている。
- 長女の保育所への送り迎え、家にお金を置いていくなど最低限の対応を行なっている。
- しかし、Aくんや子どもたちの生活面、情緒面への対応などできない状態にある。
- 現在の家庭環境から、学習に気が向かず、学力低下から学校に行きづらくなっていた。

1) 母を支援することから、家庭の養育機能を高める

(母の努力を認める、子どもたちの状況に対して母ができることを考えていただく)

2) 経済的支援制度、地域資源の利用

(①就学援助、②児童扶養手当、③生活保護が検討可能、ただし③は離婚成立が必要)
(地域の学習支援教室、教育支援センター、子ども食堂、フードバンクなど)

地域の居場所 (ニーズに応える、他者と関われる、認められる)

最後に

不登校の増加を背景に、学校においても福祉的視点で子どもを支える認識が高まっている。しかし、学校だけで子どもを支えることには限界があり、関係機関など地域のさまざまな主体との連携と協働が不可欠である。

同時に、「子どもの最善の利益」を念頭に、学ぶ権利の保障、家族に対する支援も必要となる。SSWは、専門職としての価値に根差し、子ども本人への支援を中心としながら、家庭と学校と関係者に働きかけるコーディネート機能を発揮する。

地域の中で、一つ一つの支援の積み重ねから、地域の福祉力やネットワークが発達していく面がある。

「チーム支援」「協働」「連携」などキーワードになる。これを実現するためには、コーディネートする人が必要であり、SSWへの期待が高まっている。